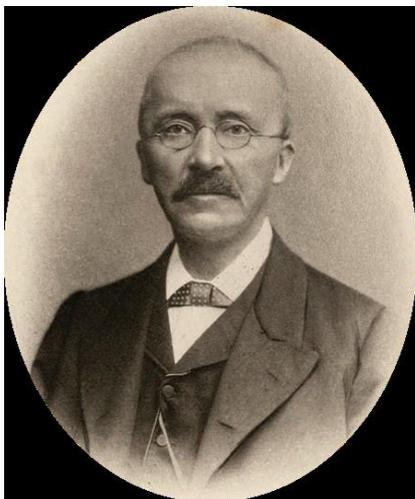


いぶき26号平成25年3月

世界の偉人たち「驚きに日本発見記」

第25回：ハインリッヒ・シュリーマン（1822～1890年）



もし文明という言葉が物質文明を指すなら、日本人はきわめて文明化されていると答えられるだろう。なぜなら日本人は、工芸品において蒸気機関を使わずに達することができる最高の完成度に達しているからである。それに教育はヨーロッパの文明圏以上にも行き渡っている。シナをも含めてアジアの他の国では女たちが完全な無知のなかに放置されているのに対して、日本では、男も女もみな仮名と漢字で読み書きができる。だがもし文明という言葉が次のことを意味するならば、すなわち心の最も高邁な憧憬と知性の最も高貴な理解力をかきたてるために、また迷信を打破し、寛容の精神を植えつけるために、宗教——キリスト

教徒が理解しているような意味での宗教の中にある最も重要なことを広め、定着させるようなことを意味するならば、確かに本国民は少しも文明化されていないと言わざるを得ない。」

（出典：『シュリーマン旅行記 清国・日本』石井和子訳（講談社学術文庫）

プロイセン共和国（現在のドイツ北部からポーランド西部）でプロテスタント説教師の父のもと9人兄弟の6番目として生まれたシュリーマンは、9歳のとき母が死去して叔父の家に預けられました。貧困から脱するために1841年（天保12年）に移住を志しますが、船が難破してオランダ領の島に流れ着き、貿易商社に入社しています。その後職を転々としながらも商才を発揮してトロイ発掘の目標に向け蓄財したといえます。また、ホメーロスの『イーリアス』を読み込むなど勉学にも励み、音読により文章を丸暗記する勉強法で多国語を理解して18カ国語を話せたそうです。

シュリーマンはトロイを発掘する前に世界一周旅行に出ており、清国（中国）に続いて1865年（慶応元年）に日本を訪れ、その旅行記の中の一節が上記の文章です。彼はまた、「本は実に安価で、どんな貧乏人でも買えるほどである。さらに、大きな玩具屋も多かった。玩具の値もたいへん安かったが、仕上げは完璧、しかも仕掛けがきわめて巧妙なので、ニュルンベルグやパリの玩具製造業者はとても太刀うちできない」とも記しています。つまり、ヨーロッパ以上に教育が行き届いているだけでなく、幕末の古くから「資源の代わりに叡智と手の技が与えられ、ものづくりに励む人たちが多い」という日本人の優れた気質にも気づいていたようです。〈M1〉